

【姫路市立山陽中学校の取組】

1 テーマ

「知的好奇心を駆りたてる、対話のある授業実践に向けて」
～教科指導において、求められる生徒の力を育むためのFTの効果的な活用について～

2 テーマ設定の理由

本校は姫路の中心部に位置し、生徒が1000人以上在籍する大規模校である。部活動が盛んで元気な挨拶が飛び交う一方、学校アンケートからは自尊感情が低い実態が見られた。平成30年度当初、キャリア教育アンケートで自己分析をすると、自己理解・自己管理能力と課題対応能力の到達度が低い結果であった。そのため、自分のことを正しく理解し課題に向けて解決していく能力をつけることで、自尊感情の高揚につながると考えた。

そこで、「授業力向上プラン推進校」としてキャリア教育を中心に研修をすすめ、授業の流れを示した「山陽スタンダード」を学校全体で共有し取り組んだ。「めあて」「振り返り」を徹底し、対話活動での話し方や質問の仕方、あいづちについても提示した。

総合的な学習の時間では、PowerPointを使って「聞き方・伝え方」を練習し、生徒は教科学習を中心とした話し合いで、教師は授業だけでなく生徒指導も含めた生活全般でも使えるように取組をスタートした。また、コロナウイルス感染症対策等の理由から取り止めていた弁論大会も全学年で復活させ、今までの伝える力の向上から、聞いた内容を自身で簡潔にまとめることで、聞く力の向上にも繋がった。

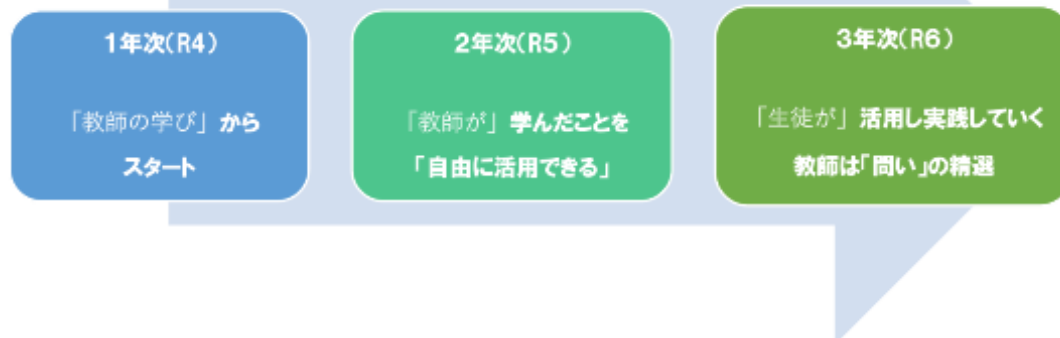
それでも、生徒が日常の授業の中で、主体的に興味をもって課題に取り組める学習スタイルが定着するまでには至らなかった。そのため、教師から生徒への受動的な一方通行の授業スタイルではなく、もっと生徒同士の関係を密にし、そこから学びを得るような能動的な学習活動が当たり前になることを目指して、授業の中でファシリテーション(FT)の導入を考えた。

今年度までの流れ



3 研究経過

山陽中学校 対話学習 3力年計画



(1) 1年次(令和4年度)の取組

～「教師の学び」からスタート～

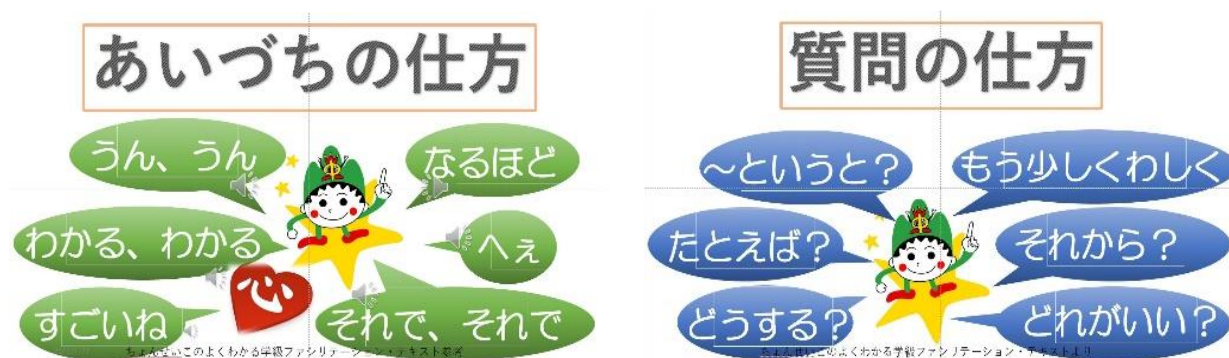
① F Tの認知と定着に向けての学校全体での取組

岩崎教授の指導の下、教師でF Tについて学ぶことからスタートした。F Tを通して変化していった新潟市立白新中学校の取組を参考に、できることから始めようと、教師皆が共通して取り組めることから行った。

学級目標づくり

- ・対話を行う上で、安心安全な場をつくる。
- ・話し方のポイント、あいづちの仕方、質問の仕方を学ぶ。(図1)
- ・自己紹介で聴き方・伝え方の実践をする。
- ・学級目標について付箋に意見を書く。
- ・模造紙等に貼りだし、あいづちの仕方、質問の仕方のカードを使って、意見を分類して班の意見をまとめる。

図1



全員で集まって講演会を行うことが難しいときは、オンラインで受け、話をまとめる練習を行った。可視化することで、情報の共有・相手の行動を促す・自分を表現する・記録を残すことにもつながっている。(図2は生徒のグラフィック)

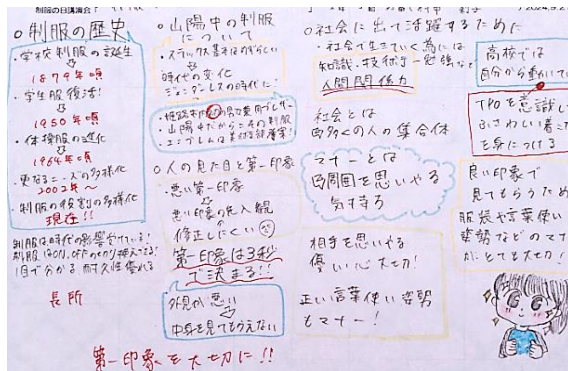
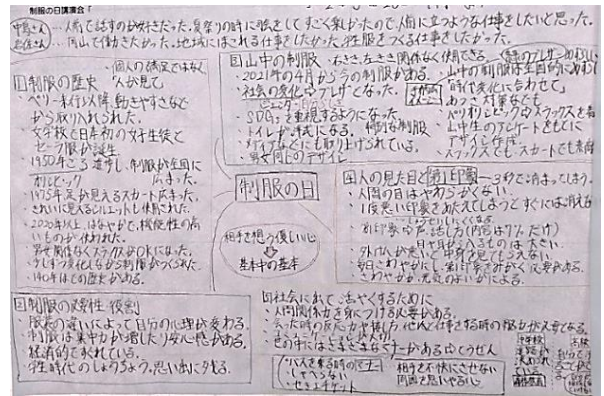


图 2



総合的な学習の時間

1 時間目(10 月)シェイクアウト訓練

- ・ PowerPoint による避難経路の確認と基礎知識を一斉配信。
- ・ 「地震災害時に必要なものって何だろう」について意見を書いた付箋を用紙に貼り分類する。

2時間目(1月)黙とう、教訓から学ぶ防災

- ・震災再現VTR視聴。
- ・PowerPointによる地震発生後の生活について一斉配信。
- ・班で、地震災害時に必要なものベスト5を決める。
- ・ワールドカフェ：班で1人ナビゲーターとして残り、他の班員は他の班の意見を見て回り、感想を書き込むなどメッセージを残す。
- ・チェックアウト（振り返り）。

② F T の認知と定着に向けての学年での取組

FTを導入し学習している時間が学年ごとで違うため、効果的に活用する場面を考えた。

3年生

体育大会、学芸発表会、学級開きなど目標決定の時にファシリテーターを中心に意見を出し合い、分類し、まとめることができた。

また、播磨及び但馬地域の抱える社会課題解決のための「地域の魅力を活かしたアイデア」についてFTを使って意見をまとめ、「まちづくりコンテスト」に応募した。

2年生

少人数班を作り、週2回程度、対話しやすい題を教師が設定し練習を行った。日々の実践や行事の度に様々なテーマを設定し「ファシリテーションのキセキ」として教室掲示し可視化した。(図3) まずはFTの理解を目的として席替えをしてもファシリテーターとライターは固定し、ファシリテーター、ライターの育成に力を入れた。

1 年生

この年の1年生は、スタート時から、3年間を見据えてFTに取り組み始めた学年である。「生徒が主体となる学年づくり」という見通しをもち、そこにFTというツールを合わせながら、総合、学活、道德の場面でFTを多く取り入れた。

また、その対話学習を教科学習に取り入れることで、教師も与えられたものでF Tを活用するのではなく、教師一人一人が、どの場面でF Tを取り入れると効果的であるかを考え、学校教育におけるF Tの活用を深めるための方向性を示すことができた。(図4は教師の教科学習での取組)

図3

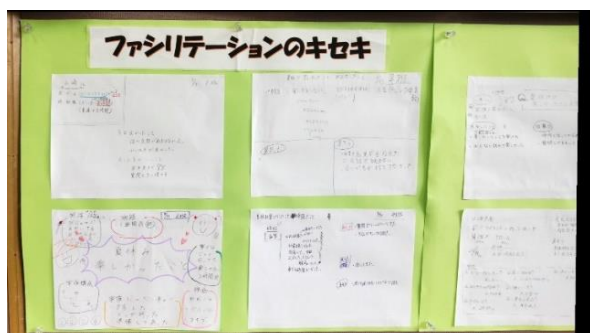


図4

教科	単 元
国語	クラスメートを紹介するスピーチをしよう！
社会	縄文から弥生時代にかけて生活はどう変わった？
社会	ウクライナのEU加盟について考えよう！
数学	図形の面積をいろいろな求め方で解いてみよう！
数学	様々な角度から図形をとらえてみよう！
数学	見取図・展開図・投影図の特徴をまとめよう！
理科	昔、どのような大地の変化があったか推測しよう！
理科	〇〇力について、調べて発表しよう！
音楽	F Tを活用して、「美しい音色」で演奏しよう
美術	文字絵の制作を振り返り、次の制作に活かそう
保体	技のポイントを理解し、マット運動のミニ先生になろう！
保体	チームの特性を生かし、フォーメーションを考えよう！
家庭	たかぎしさん一家の快適な住まい方を考えよう！
英語	グループで教科書の英文を読み、自分の考えを伝えよう！
英語	ステキな日本の旅を外国の人に紹介しよう
英語	モニーク先生をレストランに招待しよう～コース料理を考える～

(2) 2年次(令和5年度)の取組

～「教師が」学んだことを「自由に活用できる」～

① プロジェクトチームの発足

進めるにあたって、大きな問題があった。大規模校であるがゆえに、新年度の異動による教師の入れ替わりにより、F Tスキル、授業形態の定着、進捗状況について差がみられるという課題があった。また、日常の業務に追われ、研修時間の確保や目的意識の共有不足から、一部の教員から研修に対して後ろ向きと思われる意見もあった。そこで、まず教師間の対話が大切であると考えた。そのためには、教師の考えをまとめる、目標の共有を任う「つなぎ役になる教師」が必要であること、そして、個々が「対話学習の必要性」を感じることに、「対話学習(F T)＝難しい」という考えを払拭することに対して改善、工夫をしなければ、前に進むことはできないと考え、ファシリテーションプロジェクトチームを発足させた。

② 定着してきた対話学習

学活、総合、道徳、部活動、生徒会など、1年目に実践してきたことを取り入れながら、教師が効果的だと考えた場面でF Tを自由に活用し始める流れができ始めた。



③ 一人一実践の取組

前年度1年生の教師が取り組んだ一人一実践を全教師で行った。定着してきた②にあるような学習では、一人の教師が代表で指導案を作り、それを皆が共有し授業で実践するという形であった。そのため「どの部分での活用が効果的か」と教師自身の実感が湧きにくかったのではないかと考え、F Tの活用推進には教師自らが考える必要性を感じ、取り組みを行った。全ての教師の一実践冊子が完成し、それをもとに教科ごとに、ファシリテーションを用いることの課題点を教師間で共有することができた。(図5は令和5年度に行った一人一実践の一覧)

図5

No. 学年等 教科等	単元・題材名	No. 学年等 教科等	単元・題材名
1 1 国語	品詞の分類をしよう	26 2 英語	受け言葉を決めた英語のスキット
2 1 国語	自立語と付属語を分類する方法を考えよう	27 2 英語	不定詞を使って内容を伝える
3 1 社会	承久の乱であなたなら朝廷、幕府、どちら側につく？	28 2 英語	Let's welcome Ms. Monique's family to Sanyo!!!
4 1 数学	必要なマグネットの個数の求め方を考えよう	29 2 音楽	歌唱表現を工夫しよう
5 1 数学	必要なマグネットの個数の求め方を考えよう	30 2 美術	美のタイムトラベル～洞窟壁画の謎を解け～
6 1 数学	いろいろなモビールをつかって問題を解こう	31 2 保健体育	ソフトボールのバットのミートポイントを探そう！
7 1 理科	凸レンズの厚さを変えると、焦点距離はどのように変わるだろう？	32 2 道徳	仏の親戚
8 1 理科	直方体のガラスを通して鉛筆を見たとどう見えるか	33 特支 自立活動	公共交通マナーの確認
9 1 英語	Which～？と尋ねて、その質問に答えよう	34 3 国語	詩語
10 1 英語	自分の家族を紹介しよう	35 3 国語	俳句を作って句会を開こう
11 1 音楽	浜辺の歌	36 2 国語	話し言葉と書き言葉をどう使い分けるか考えよう！
12 1 美術	靴のスケッチで魅力的に感じた要素を共有し、次の制作に活かそう	37 3 社会	日本が日中戦争を推し進めた責任は、国民にあるのだろうか
13 1 保健体育	剣道	38 3 数学	いろいろな二次方程式を解き、気づいたことや考えたことをまとめよう
14 1 保健体育	ストレスへの上手な対処法を考えよう	39 3 数学	二次方程式をいろいろな方法で解き、気づいたことや考えたことをまとめよう
15 1 家庭科	和服の特徴を理解する	40 3 理科	酸とアルカリを混ぜたときの変化について考察しよう
16 全校 道徳	姫路空襲	41 3 理科	このメダカがもっている遺伝子は何だろう？
17 特支 特別活動	終学活での対話（国語力・コミュニケーション能力）	42 3 英語	はじめての出会い～歓迎する～
18 2 国語	話し言葉と書き言葉をどう使い分けるか考えよう！	43 3 英語	おもてなしプランのメール文を書こう！
19 2 国語	話し言葉と書き言葉の特徴を考えよう！	44 3 英語	グループで協力してリーディングをしよう
20 2 社会	豪雨災害発生！地域のみんなの命を守りたい！	45 3 音楽	浜辺の歌の曲にふさわしい表現を考えて歌おう
21 2 社会	災害に対する備えー自衛隊が来る前にー	46 3 保健体育	バレーボール
22 2 数学	ともなうて変わる2つの数量の関係を考えよう！	47 3 家庭科	たかぎしさん一家の快適な住まい方
23 2 数学	図形の性質と証明	48 3 技術科	スマホスタンドをよりよいものにするための方法を考えよう
24 2 理科	葉のつくりとはたらき	49 3 道徳	風景開眼
25 2 理科	各分野の導入とまとめ	50 特支 体育	みんなでルールを考えて、ライン鬼をしよう
		51 部活動 部活動	チームの目標設定

④学校評価アンケートからの分析

「先生方はわかりやすい授業をしてくれているか」という質問には

よくあてはまる、やや当てはまるを合わせると、R 3 (90.4%) R 4 (88.9%) R 5 (89.9%) と高い数値を維持している。これは、継続して実践研修をしてきた成果といえる。

「学校は楽しいですか」という質問には

よくあてはまると答えた生徒が、R 4 (48.4%) R 5 (54.9%) と6ポイントも上がっている。対話学習を通じて、コミュニケーション能力が高まり、学校に居場所があると、自覚している生徒が多いと考えられる。

「先生方は、子どものことを理解してくれているか」という質問には

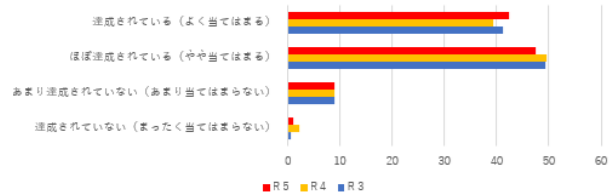
よくあてはまる、やや当てはまるを合わせると R 3 (80.5%) R 4 (78.9%) R 5 (84.4%) という結果になった。

「先生方はいじめのない楽しい学校を作ろうとしているか」という質問には

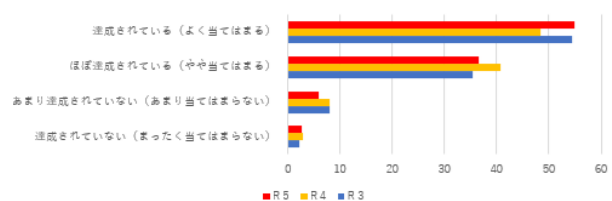
よくあてはまる、やや当てはまるを合わせると R 3 (87.6%) R 4 (87.4%) R 5 (90.7%) と評価が高くなり、特によくあてはまると答えた生徒は R 4 (49.6%) R 5 (60.4%) と大幅に高くなっていた。

対話学習の導入は、生徒間の対話活動だけでなく、「教師と生徒間の信頼関係」にも大きく関与していると思われる。

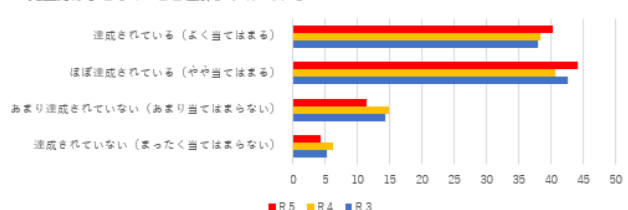
先生方はわかりやすい授業をしてくれている



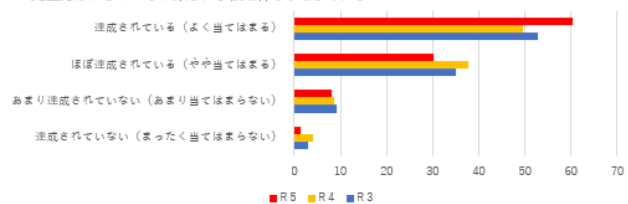
学校生活は楽しい



先生方は子どものことを理解してくれている



先生方はいじめのない楽しい学校を作ろうとしている



(3) 3年次(令和6年度)の取組

～「生徒が」活用し実践していく教師は「問い」の精選～

① F Tの日常化

F Tに取り組み始めて3年目、様々な場面で使われるようになってきた。生徒の中でも、対話活動はあって当たり前のものになってきている。教師が使い始めたF Tスキルであったが、生徒たちの中でも、思考のツールの一つにF Tが浸透し、生徒会活動、学級での話し合い、部活動での振り返り、様々な場所で、使われることが日常になっている。F Tのルール「①否定しない ②最後まで聴く ③書く描く ④協力する」という当たり前が、出来るようになりつつある。

生徒の中にF Tのマインドが備わってきたタイミングで、いかに教師側が知的好奇心を駆りたて、主体的・対話的で生徒がわかる授業のための、研ぎ澄まされた「問い」を立てることができるかということに研究の中心をおいた。そして「めあて(目標)」と「振り返り(評価)」までの見通しを明確にした上で、3年次も「一人一実践」に取り組みながら、そして教科毎に教師もF Tをしながら、どのような場面でF Tを活用することが効果的であるのかを検討してきた。

② 教師のマインドの方向付け

本年度は、4月最初の教職員研修で、「学校の重点目標」達成に向けて、自分はどのようにかかわっていくかについて、教職員同士での対話形式での協議を実施した。皆で学校目標達成の在り方について考えることで、それぞれ教師が自身の特技と個性を生かすための手段は違うが、目標(めざす生徒像:生徒に身につけさせたい力)が同じであることを共有することができた。またその達成に向けての個人目標を“希望の星”紙面に書き出したもの(図6)を掲示し、可視化したことで、いつでも「生徒の成長させるために自分には何ができるか」という向上心を駆りたてることができた。

また、各教科で対話での協議を実施し、各単元・教材ごとで、生徒の意欲を駆りたてる、生徒も教師もが、「わくわくする発問」について考えた。次に、各教科からの発問、授業展開、教材の捉え方、生徒理解の仕方について発表、共有することで、他教科とのつながり、学年ごとの積み重ねを知ることができ、縦断的かつ横断的な学びへの見通しをもつことができた。学びの内容の一致や段階的な取組について知る有意義な時間となり、今後も継続的な検討の必要性を感じた。(図7は教師のF Tの跡)

図6

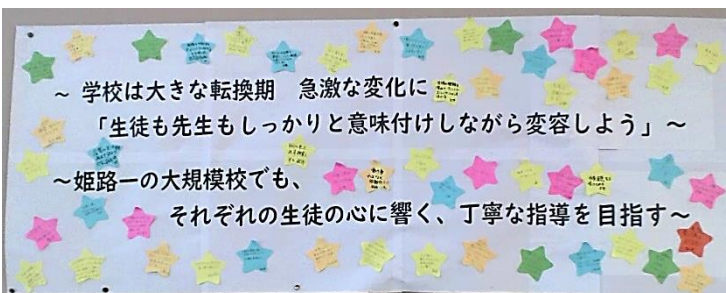
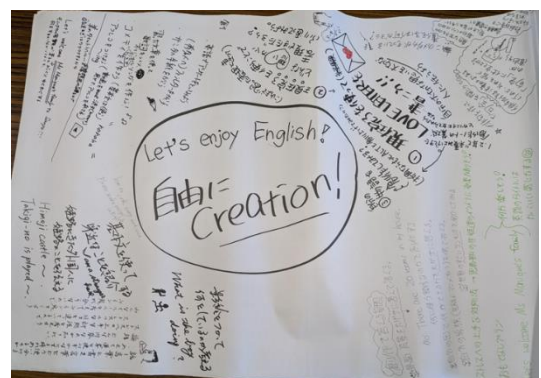


図7



③ 生徒たちの成長

生徒会では、生徒会方針(目標)決めにF Tを用いて「えんたくん」(図8)で、山陽中学校をどうしていきたいかということについて、生徒一人一人が当事者意識をもって協議できた。校則の見直しについても、全校生徒にアンケートを実施し、生徒会(役員)が中心となって、個人的な考え、思考、見解のみにとらわれず、他者の意見を傾聴し、靴下や靴の色、髪型など、生徒全員にとってよいものという視点で検討を重ねた。特に3年生は3年間のF Tの取組により、自然と対話の効果を体感し、手法が身に付き、修学旅行の運営、ルールづくりを、学年生徒全員参加の学年議会で決定することができた。

この取組が更なる達成感と自己肯定感の向上につながり、教師主導から生徒主導へと安心して移行できるようになった。

そして、生徒の力の向上と成果が、学校行事は生徒主体であってこそという考えを生み、生徒主体で教師は支援という意識の定着につながった。体育大会では、生徒会（役員）が中心となり、全校生徒 1000 名を指揮した。日々取り組んできた F T のマインドから、「全員が参加できる 全校生のための体育大会」と位置づけ企画、達成までに至った。生徒全員が一人一人の在り方を受容する姿勢を大切にし、1000 名規模にもかかわらず、3 学年を組毎に縦割りし、上級生から下級生に向けた「大縄跳びの秘伝書」の伝授。学級対抗全員リレー、学年を超えた混合リレーの企画。特別支援学級の生徒も含め、山陽中学校全員が一つになりたい、なれるという思いから、生徒会で種目を考え、実施。体育大会終了後に、代表生徒からの自分たちの言葉で達成感や感動を語る姿と言葉を、受け止める全校生徒(図 9)の態度に成長を感じることができた。

図 8

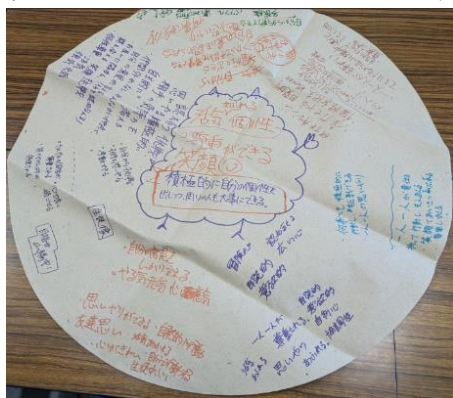


図 9



4 成果と課題

3 年間で教師の意識も変わってきた。F T が浸透し、様々な場面で使われるようになってきた。それは「アウトプット」型の授業が定着してきたとも言い換えることができる。主体的・対話的で深い学びを進めていくためのツールとしてわが校では F T を取り入れてきた。生徒の中でも、対話活動はあって当たり前前の活動と定着し、授業、学活、部活動等、様々な場所で、生徒自らが活用できるようになってきた。まだ、すべての生徒がファシリテーターやライターができる域には至ってはいないが、自分の考えを書く・描くことや、皆の前で自分の考えを言葉にできるというスキルは確実に身につけている。

それには先のアンケート結果で示した、先生は「子どものことを理解してくれる」や「わかりやすい授業をしてくれる」、「学校は楽しい」といった項目のポイントが高いことから、「自分が受け入れられている（居場所）がある。」という、F T のルールにある自分の意見を受け入れてくれる「安心安全な場所」ができたと生徒が感じていると表している。その土壌を作っていくのは日々の積み重ねであり、それには教師の努力と見通しが不可欠であったと考える。

F T（対話学習）は、詰め込み型教育、オンライン、塾のような学校と類似している教育形態では、効果は薄れるのではないかと考える。「対話」にあたっては、自分の考えが否定されないという安心安全な場所の確保ゆえにできる双方のやり取り、A I ではない人間同士だからこそできる「コミュニケーションの学び場」の設定が条件であり、そこに学校教育の意味が見いだせたように感じる。また、本校では、F T を取り入れた学習スタイルの定着は難しいのではと、二の足を踏む教師の思いに反し、生徒たちはお互いに、支え、学び、伝え合うなかで大きく成長を遂げた。できないのではなく、教師側がさせていなかったということにも気付くことができた。

この3年間のFT研修の最大の成果は、教師のマインド変化と考える。そして、教師が変わることで、生徒が変化していくということをひしひしと肌で感じた。しかし、このマインドをもち続け、繋げていくことこそが、実は最も大切で難しいものである感じる。多忙な日々、FTの取組の有用性を全職員が感じ、向上心を持ち生徒を成長させるために教師の学びを止めないことが、教師という職業において必要不可欠なマインドであり、スキルであろうと考える。



参考文献

『ファシナビ』 新潟市立白進中学校（新潟市立白進中学校）

『みんなが主役わくわくファシリテーション授業』

新潟にいがたファシリテーション授業研究会 （新潟日報事業者）

『ファシリテーションの教科書』 グロービス経営大学院教授 吉田素文（東洋経済新報社）